



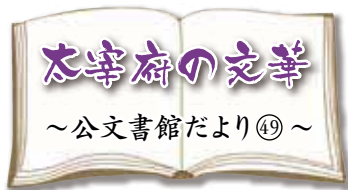
明治維新150年特集

太宰府への五卿遷座

中央の政変により都落ちして長州藩に滞在していた五卿は、幕府による長州征討の危機と長州藩内の内部抗争状況のもと、福岡勤王党月形洗蔵らの活躍もあり、福岡藩に移ることになりました。元治2（1865）年正月14日に長州を出発し、筑前赤間宿に約1カ月滞在ののち、2月13日から2年10カ月、延寿王院（太宰府天満宮別当大鳥居家、現西高辻家）に滞在します。

8ツ時（午後2時ごろ）に太宰府に入った五卿は、浮殿前で輿を降り、延寿王院前院主大鳥居信全と現院主信蔵とが門前まで出迎えます。信全・信蔵が五卿にご機嫌伺いを行い、つづいて一山惣代として社家の執行坊・上座坊がご機嫌伺いをしました。翌日には五卿がそろって神前に参拝した後、社内を案内され、宝物を見物します。これらの手順は事前に福岡藩の寺社奉行にお伺いをして決められました。その際、ご機嫌伺いとともに五卿およびその従者らに「梅ヶ枝焼」を進呈したい旨、延寿王院から申し出ています。

また、五卿を迎えるにあたって、8



項目にもおよぶ注意事項が「御用日記」（延寿王院の公的記録）に記されています。これによると、火の用心を心掛け夜回りを厳重にせよ、社辺は茶屋年番が、町々は町役組頭が日々見廻り、気を付けて掃除するようになど、まちの管理一般に関わる事項のほか、五卿の遊覧に出会えばそれがお忍びであつても下座せよ、府中の子どもは社辺で遊ばないように、宿舍となる院内には不意に入らないように、裏山には子どもであつても上らないようになど、五卿に不敬がないよう、子どもの行動に至るまで規制する細やかな取り決めがなされていました。

ほかに、他藩のお尋ね者や問者（スパイ）などが太宰府に入り込むだろうから、たとえ一泊であつてもその姓名を聞き糺して身元を申し出るよう、延寿王院から社中へ達しを出した記事が「御用日記」に残っています。五卿の受け入れに当たっては、地元にもひとかたならぬ苦労があつたようです。

太宰府市公文書館 朱雀 信城